

## 賢治詩の発想

—宮沢賢治『春と修羅』の序を通して—

# CREATIVE MECHANISM BEHIND KENJI MIYAZAWA'S POEMS

— THROUGH THE STUDY OF HIS PROLOGUE TO [HARU AND SHURU] ("SPRING AND INNER CONFLICT") —

宇野憲治

Kenji UNO

The human mind changes incessantly. A poet who succeeded in expressing our constantly changing minds is Kenji Miyazawa.

Though he passed away at the young age of 38, his power of keen introspection grips our mind and leaves us in utter wonder. He left behind numerous works which entrance us with the succinct and charming expressions of his constantly changing mind. Nevertheless, I believe that his mental state is most comprehensively described in his prologue to 『Spring and Inner Conflict』, his own anthology. This study is an observation by the present writer of his creative mechanism through analysis of the prologue.

私たちの心は瞬間瞬間変化している。その変化極まりない人間の心に焦点をあて、それを表現した詩人がいる。科学者としての眼、宗教者としての眼、音楽家としての眼、教師・指導者・伝導者としての眼、詩人としての眼をもった宮沢賢治である。三十八歳という若さで亡くなったにもかかわらず、その洞察力は鋭く、今も私たちの心を把えて離さない。そんな賢治の魅力が端的に現れていると思われる幾つかの作品がある。「銀河鉄道

の夜」・「よだかの星」・「ゼロ弾きのゴースト」・「注文の多い料理店」・『春と修羅』の詩編などであるが、より集約的に賢治の考え方が表れているのは、なんとといっても、『春と修羅』の序に他ならないと私は思う。宮沢賢治の発想を考えようとする時、その意味で、この『春と修羅』の序を分析・検討することは、賢治の内奥に深く入って行く一番よい方法ではないかと思うのである。

詩集「春と修羅」の詩編が書かれた前後の書簡で、賢治は次のように述べている。多くは友人保阪嘉内に宛てたものであるが、それらの書簡の一部を次に挙げておく。

私共が一切の現象を自己の中に抱蔵する事ができる様になったらその時こそは高く高く叫び起ち上り、誤れる哲学や御都合次第の道徳を何の苦もなく破って行かうではありませんか。

私は斯う思ひます。誰も退学になりません退学なんと云ふ事はどこにもありませんあなたなんて全体始めから無いものですけれども又あるのでせう退学になったり今この手紙を見たりして居ます。

（大正七年）「三月二十日前後」保阪嘉内あて 封書

実に一切は絶対であり無我であり空であり無常でありませうが然もその中には数知らぬ流転の衆生を抱含するのです。

「六月二十七日」保阪嘉内あて 封書

私の世界に黒い河が速にながれ、沢山の死人と青い生きた人とがながれを下って行きます。（中略）流れる人が私かどうかはまだよくわかりませんがとにかくそのとほりに感じます。

「十月一日」保阪嘉内あて 葉書

石丸さんが死にました。（中略）次の日の新聞に石丸さんが死んだと書いてありました。私はその日「今日は不思議な人に遭った。」と話してゐましたので母は気味が悪がり父はそんな怪しい話をするなど、云つてゐました。石丸博士も保阪さんもみな私のなかに明滅する。みんなみんな私の中に事が起る。

（大正八年）「八月上旬」保阪嘉内あて 封書

私は何もしない。何もしていない。幽霊が時々私をあやつって裏の畑の青虫を五匹拾はせる。どこかの人と空虚なはなしをさせる。

「八月二十日前後」保阪嘉内あて 封書

或る心理学的な仕事の仕度（中略）ほんの粗便な心象のスケッチでありません。私はあの無謀な「春と修羅」に於て、序文の考えを主張し、歴史や宗教の位置を全く変換しやうと企画し、それを基骨としたさまざまな生活を発表して、誰かに見て貰ひたいと愚かにも考へたのです。

（大正十四年）「二月九日」森左一あて 封書

とある。いづれの書簡も、目には見えない「心の不思議」を何とか把握しようとしたものである。その変化するものしないもの、存在そのものをよく見つめ、自分自身の心を素直に語っているのである。

## 序

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

（あらゆる透明な幽霊の複合体）

風景やみんなといつしよに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにともりつづける

因果交流電燈の

ひとつの青い照明です

(ひかりはたもち、その電燈は失はれ)

これらは二十二箇月の

過去とかんずる方角から

紙と鑛質インクをつらね

(すべてわたくしと明滅し

みんなが同時に感ずるもの)

ここまでたもちつづけられた

かげとひかりのひとくさりづつ

そのとほりの心象スケッチです

これらについて人や銀河や修羅や海膽は

宇宙塵をたべ、または空氣や塩水を呼吸しながら

それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが

それらも畢竟ころのひとつの風物です

ただたしかに記録されたこれらのけしきは

記録されたそのとほりのこのけしきで

それが虚無ならば虚無自身がこのとほりで

ある程度まではみんなに共通いたします

(すべてがわたくしの中のみんなであるやうに

みんなのおのおののなかのすべてですから)

けれどもこれら新世代沖積世の

巨大に明るい時間の集積のなかで

正しくうつされた筈のこれらのことはが

わづがその一點にも均しい明暗のうちに

(あるひは修羅の十億年)

すではやくもその組立や質を變じ

しかもわたくしも印刷者も

それを變らないとして感ずることは

傾向としてはあり得ます

けだしわれわれがわれわれの感官や

風景や人物をかんずるやうに

そしてただ共通に感ずるだけであるやうに

記録や歴史、あるひは地史といふものも

そのいろいろの論料アトコトといつしよに

(因果の時空的制約のもとに)

われわれがかんじてゐるのに過ぎません

おそらくこれから二千年もたつたころは

それ相當のちがつた地質學が流用され

相當した證據もまた次次過去から現出し

みんなは二千年ぐらゐる前には

青ぞらいつぱいの無色な孔雀が居たとおもひ

新進の大學士たちは氣圈のいちばんの上層

きらびやかな氷窒素のあたりから

すてきな化石を發掘したり  
あるひは白堊紀砂岩の層面に  
透明な人類の巨大な足跡を  
發見するかもしれません

すべてこれらの命題は

心象や時間それ自身の性質として  
第四次延長のなかで主張されます

大正十三年一月廿日 宮澤 賢治

この「春と修羅」の序は、一読しただけでは難解であり、その意味は直ぐには私たちにうまく伝わってこない。しかし、幾つかの書簡等にみられる「心の不思議」の問題に目を馳せる時、自ずから浮かび上がってくるものがある。賢治は、その不思議なものの正体を科学者としての目で、客観的に把握し表現しようとしているのである。また、科学用語・宗教用語などを駆使しながらその思いを文学的表現にまでうまく昇華していると思う。そして、その根底には、仏教でいう一念三千の考え方が強く影響しているように思う。参考までに、仏教辞典から一念三千の考え方を引用しておく。

一念三千は仏教の極理である。(中略)観心本尊抄摩訶止観第五に云く「夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す、此の三

千・一念の心に在り若し心無んば而已(やみなん)介爾(げに)も心育れば即ち三千を具す乃至所以に称して不可思議境と為す意此に在り」さて十界とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏である。十如とは、如是相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等である。三世間とは五陰と衆生と国土の世間である。

この考え方もすぐには理解し難い考え方ではあるが、賢治の「春と修羅」の序の表現と重ね合わせて読む時、一層明確になってくる考え方で、と私には思われる。「春と修羅」の序の冒頭に、

わたくしという現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

とあるが、この三行の中に記されていることは、「わたくし」というものをうまく言い取っているように思われる。「現象」というのは「あらゆる状態そのもの」であり、その宿命として、変化するものである。仏教的表現を借りれば「生・住・壊・空」と言つてよい。この世のすべては、この「生・住・壊・空」の状態を推移していく。このサイクルの時間的長さには物質によって違い、五官で感じられる感じ方も自ずから違ってくる。しかしそれは、瞬間瞬間生じては滅していく原子のようなものから、永遠に近いと感じられるような宇宙的なものまで、森羅万象を貫いた法則である。人間にとってもそれは例外ではない。すべての物は、誕「生」し、ある一定の「住」という状態を保って、ついには「壊」(死)に至り、五官

では感じられない「空」の状態になっていくのである。星の一生を考えるとそれはよく理解できると思う。宇宙に存在しているあるエネルギーが、星間物質を集め、星を誕生させ、それらが星としての生命を保ち、永遠に見える星もいつかは死滅し、再び宇宙空間に散っていくのである。表面的には、物質の集合・離散と考えるのであるが、その根底には、それらの物質を、集合・離散させているあるエネルギーが存在するのである。科学者であった賢治の眼には、この宇宙現象と仏教の不変の原理がうまく結び付いているのである。「わたくし」を「現象」と扱えていること自体、賢治の物を見る眼の確かさを証明している。

「交流電燈」とは、本来は無機質なものである。家庭用等に引かれていた電燈のことであるが、それをわざわざ「有機」と表現しているところに賢治独特の視点がある。「仮定された有機交流電燈」とは「わたくし」という状態そのものは）仮の存在である生きた交流電燈」のようなものであり、その「交流電燈」の「青い照明」がついていること自体、とりもなおさず、私たちが今の瞬間生きていることの証明なのである。電燈が壊れてしまえば、私たちにはその「青い照明」は失われたかのように思えるが、賢治自身、電燈は失われても、いったん電燈から出た青い光は永遠に失われないと考えている。事実、真空状態にあつては、いったん光源から出た光は、永遠に光りつづけるのである。この光は、前述した「生・住・壊・空」の根底にある宇宙エネルギーと大いに関係している。それを「生命または命」と呼んでもよいと思う。

それはさておき、なぜ賢治は「わたくし」という現象」を「交流電燈」に譬えたのであろうか。私たちが日常使用している「交流電燈」は一秒間に

五十回または六十回の点滅を繰り返している。点滅を繰り返しながらも常に灯り続けているように私たちに見えるのは、人間の眼の残像作用による錯覚なのである。私たちの心には、瞬間瞬間さまざまな思いが起つては消え、消えては起つている。前述した仏教の一念三千の考え方からすれば、我々の心の中では、私たちが日常使用している電燈以上に、いろいろな思いが瞬間瞬間明滅を繰り返しているのである。しかし、常に自分であることには変わりはない。「青い照明」がともりつづけているように、私自身も私自身を生きつづけているのである。

それぞれ思いは人によって異なっており、心は瞬間瞬間と移ろつていく。にもかかわらず、「青い照明」は確かに灯りつづけているのである。その背後には不可視ながら確かに灯りつづけている本体、すなわち自分の命がある。内面では変わり続けているにもかかわらず、他から見て変わらないように見える命をもった一人の自分、それが「有機交流電燈の／＼ひとつの青い照明」という表現に端的に表されている。

そしてそういう自分が「風景やみんなといつしよに」、外界の風景や他人の影響を受けながら「せわしく明滅」するのである。心の中では瞬間瞬間変化しながら、確実に自分として存在し続けているのである。

「因果交流電燈」は、前述した「有機交流電燈」とほぼ同様の意味である。外界からの刺激によって心の中は変化する。一方で、心の中に生じた「喜怒哀楽」の感情が、外界を見る時、他人に接する時、外界に他人に影響を与える。いや、それはどちらが原因であり、結果であるというのではなく、原因がすでに結果であり、結果がすでに原因であるという仏教で言う「因果俱時」の考え方によつていのである。そのように「因果交流電

燈の／ひとつの青い照明」とは、瞬間瞬間心の中で変化し続ける自分と、外界から見て青く灯りつづけている自分（一見矛盾する自分ではあるが）、表面に表れた自分と心の中の自分であり、それらを賢治はこれらの言葉によつて端的に表現しているのである。

（ひかりはたもち、その電燈は失はれ）とある。ひかりは、「永遠なるもの」即ち「賢治が書いた作品やスケッチ」であるという考え方もある。確かにその考え方も成り立つ。人は死んでしまつてもその作品は、その言語が通ずる限り永遠性を保ち続けるからである。光の性質は、科学的には質量不変の法則に従い、いったん光源から発せられると真空状態においては、たとえ光源が失われても永遠にその光を保ち続けるのである。光が消滅すると私たちが思っているのは錯覚であつて、種々の物質のために光が乱反射し、散乱しているにすぎないのである。真空では、光は消滅しない。賢治は自分の肉体と生命をこのような観点から捉え、光と電燈の比喻でもつて、人間の生命と心の働きをこのような表現に託して説明したのであろうと私は考える。

「これらは二十四箇月の」とあるが、これは、一年と十カ月間の出来事・感じたことをまとめた詩集「春と修羅」の中に収められている数多くの詩編である。「春と修羅」所収の詩編にはすべて日付がつけられており、その配列はその日付け順である。「屈折率」（一九二二、一、六）から始まり、「冬と銀河鉄道」（一九二三、一二、一〇）で終わっている。とすると、正確には「二十四箇月の」とあるべきところである。

「過去とかんずる方角から」とあるが、仏教用語に「三世」という言葉

がある。「三世」とは過去・現在・未来であるが、その中で、真実あるのは現在だけだという考え方があつた。正確に言えば、現在の一瞬一瞬に過去と未来が含まれているのである。「過去と感ずる」「未来を想う」ことができるのは、現在に生きているからこそである。自分にとっては、既に無くなつてしまつていく過去であるにも拘わらず、言葉や写真等を契機として過去を感ずる、あるいは思い出すことができるのである。また、過去の出来事・現在の出来事から推して未来を想うことができるのである。その意味で賢治が表現しているように、あるのは現在だけであるという立場からすれば、「過去とかんずる方角」という表現は正確なのである。

次に、（すべてわたくしと明滅し みんなが同時に感ずるもの）という表現についてである。「すべて自分の心の中で生じたもので、私だけでなく、みんなが同時に感ずるもの」というほど意である。瞬間と永遠、また個と普遍というものがあつて、突き詰めていくと究極的には、個を越えて永遠性・普遍性に通ずるものである。そういうものを賢治自身はメンタルスケッチ（心象スケッチ）として書き留めている。一年と十箇月（正確には二十四箇月）の間に種々感じたり思つたりしたこと、瞬間瞬間消えてしまつていったものもあるだろうし、しばらく記憶に残つたものもあつただろう。しかし、ここまで忘れることのできなかつた種々の思い、自分だけでなくみんなが同時に感じるであろうもの、それらの「陰と光のひとつさ」をそのまま表現した心のスケッチである。前述したように、賢治の詩には詩編ごとに日付が付されている。もちろんそのとき感じた思いを大切にすつた心からであり、見た風景であつたらうが、より正確にその思いを表すため、何度も何度も推敲を繰り返している。二次稿・三次稿・四次稿と

何度も推敲を重ねているものもある。そのことはとりもなおさず、その時の実感を、できるだけ正確に表現しようとする心の表れではなかったろうか。表現は変えても、その時の思い・その時感じた心は変えないという姿勢の現れでもある。そのような賢治の思いや自負が、これらの表現や日付に込められているのである。

第三連の冒頭二行はたいへん解釈し難く、「春と修羅」の序に触れているもののほとんどはこの部分の解釈を避けている。触れている論者にしても「いろいろな生物」、とか、「森羅万象」とかと解しているにすぎない。しかし、それでは十分納得できない。なぜ賢治は「人や銀河や修羅や海膽」という表現を取ってしたが問われなければならない。「海膽」については生物の進化の問題で触れている論者もいるが、ここで「海膽」だけを特別に取り出すのは不自然である。「人や銀河や修羅や海膽」という表現は並列的であるため、一まとまりにして考えなくてはならない。第一連・第二連で見て来たように、終始、「人の心の変化」を問題としている賢治にあつては、他の論者が論じているとは違った意味を、この表現に託そうとしていたのではないだろうか。賢治がこだわっていたのは、あくまで人間の心の変化なのである。仏教には「六界」という考え方があり、「地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天」であるが、それらを心の状態に置き換えて読んでみれば、「苦しみ・欲望・本能のまま・争い(葛藤)・平常心・歓喜」の心の状態と言つてよい。「海膽」とあるが、海膽は海の底に住み、いがいがの自分の殻の中に閉じこもつており、見る目も痛々しく苦しみを背負った「地獄」の住人のように思える。また、「銀河」は「天」

を意味すると考えられる。つまり、「人や銀河や修羅や海胆」という表現には「平常心・歓喜・争い・苦しみ」という人間の心の状態が象徴的に表現されているのではないだろうか。そして、それぞれの人の心の状態で、「春と修羅」という詩集について、自分自身の思いを抱くのである。しかし、賢治に言わせれば、それらの思い自身も、結局は「その時感じた自分自身の心のひとつの風物」にすぎないのである。

同じ人であっても、喜んでいる時に読んだ詩、悲しんでいる時に読んだ詩、苦しんでいる時に読んだ詩、それらの詩は同じ詩であっても心の状態によつてすべて意味が違つて感じられる。読んだ年齢によつても随分違う。即ち、同じ物でも、おかれた心の状態によつて、その受容のあり方は異なつてくるのである。その時その時に応じ、素晴らしいと思つたり、退屈だと思つたり、読みたくないと思つたり、無意味だと思つたりするのである。それぞれがそれぞれの心境に依つて「新鮮な本体論」を考えるのである。そして、「ただたしかに記録されたこれらのけしき」は、まさにこの時のけしきであり、その時の賢治の心象を如実に表現しているのであるが、それを「虚無」だと思ふ人がいれば、その人にとっては賢治の心象スケッチは「虚無」であり、ある程度まで共感する人もいるのである。全員が全員ではなくても、ある程度まで共通する思いとなるのである。

賢治自身が実感を持つてできるだけ正確に書き留めた「春と修羅」の詩編、それを人はいろいろ評価するであろう。しかし、「それらも畢竟このろのひとつの風物」にしかすぎないのである。しかし、多くの人が読んで共通の思いを抱くのは、「私の中にみんながあり、みんなの中にも私と共通する何か」があるからである。

仏教の考え方の中に「胎藏曼荼羅」と「金剛曼荼羅」の考え方がある。仏教の宇宙観・世界観なのであるが、どんな小さいものの中にも、例えば海水の一滴の中にも大海の成分は含まれているし、大海そのものは一滴一滴によって成り立っている。個が普遍へ、普遍が個への両方向性が「わたくしの中のみんな」「みんなのおのおののすべて」という表現によく表されている。

第三連全体では、詩集に対する批評の在り方について述べている。賢治が自費出版した詩集「春と修羅」の詩について、人がどう言おうと、どう思おうとそれはそれでよいと言う賢治の考え方がよく出ている。

私たちの住んでいる世界は三次元世界である。三次元世界においては、時間を越えることができない。わたしたちは物事を判断する上において、明確になった「時間の集積」（人類の歴史）の中でいろいろと物事を考える。しかし、いくら時間の集積があると言っても、あるのは今現在だけである。記憶に残るとか、言葉で残るとか、写真に残るとか、で過去を思い出すことができたとしても、過去は「感ずるもの」ではない。賢治は詩編に日付を付し、その時の心境を固定しているが、次の瞬間には賢治自身の心も変化しているのである。このような瞬間瞬間消えてゆくその思いを、スナップ写真で撮るかのようには言葉として表現してゆく、それが賢治の言う「心象スケッチ」なのである。

「これら新世代沖積世の／巨大に明るい時間の集積のなか」とは、「人類の歴史の中」という意味である。その歴史の中にあつて、自分の心をできる限り正確に表したのが詩集「春と修羅」である。そして、それを本とし

て出版したわけだが、本となった以上、「わたしも印刷者」も、それをある程度までは変わらないと「感じる」傾向があるのは確かである。しかし、実は、次の瞬間、早くも「組立や質」を変えていくのが真実である。活字にしたから変わらないと思うのではあるが、活字化した途端、既に現実の賢治の心は変化しているのである。すべては過去のものとなる。その最たるものが歴史とか記録、あるいは地史というもので、その時代には正しいと認識されているものが、時代が変わると全く変化してしまう。これと同内容のことが「銀河鉄道の夜」にも表現されている。

これは地理と歴史の辞典だよ。この本のこの頁はね、紀元前二千二百年の地理と歴史が書いてある。よくごらん、紀元前二千二百年のことではないよ、紀元前二千二百年のころにみんなが考えてみた地理と歴史というものが書いてある。

だからこの頁一つが一冊の地歴の本にあたるんだ。いいかい、そしてこの中に書いてあることは紀元前二千二百年ころにはたいてい本当だよ。さがすと証拠もぞくぞく出てくる。けれどもそれが少しどうかなと斯う考えたしてごらん、そら、それは次の頁だよ。

紀元前一千年。だいぶ地理も歴史も変つてらう。このときには斯うなのだ。変な顔をしてはいけない。ぼくたちぼくたちのからだだって考えだつて、天の川だつて汽車だつて歴史だつて、ただそう感じてゐるのだから、そらごらん、ぼくといつしよにすこしこころもちをはずかにしてごらん。いいか。

とある。わたしたちが思うとか考えるとかするというのは、三次元世界に住んでいる時空制約のもとに「感じてゐるにすぎない」のである。現実



には、過去にいくこともできないし未来に行くこともできない。ただ心の中では過去に逆上ったり未来に行ったりできるのである。その意味で心の中だけは三次元世界の制約を越え、時空を越え、四次元世界へと入っているのである。しかし、考え方は自分が生まれた「その時代」・「その国の状況」等の考え方に大きく影響を受ける。時代が経過すると「歴史や地史、地質学」等も過去のものとは全く違ったものが表れ、それに相当した証拠もつぎつぎに過去から出現してくるのである。

みんなは二千年ぐらゐ前には

青ぞらいつばいの無色な孔雀が居たとおもひ

「二千年ぐらゐ前には」とあるが、多くの論者は二千年後の人がその時点に立って現代を見た風景と論じている。その考え方でよいと私も思う。しかし、青空いつばいの「無色なクジャク」は古代インドの宇宙観の中にあるし、また象や亀が大きな円盤状の地面を支えているという考え方もある。また宮沢賢治自身の作品「インドラの網」中に、

まことに空のインドラの網のむこふ数しらす鳴りわたる天鼓のかなたに、空一ぱい不思議な大きな蒼い孔雀が、寶石製の尾ばねをひろげ、かすかにクウクウ鳴きました。その孔雀はたしかに空には居りました。けれども少しも見えなかつたのです。たしかに鳴いて居りました。けれども少しも聞こえなかつたのです。とある。

新進の大學士たちは氣圈のいちばんの上層  
きらびやかな氷窒素のあたりから  
すてきな化石を發掘したり

とある。大正十一年にアインシュタインが来日している。賢治は、直接会ってはいないが、その影響をかなり強く受けているようである。宇宙に行くことも夢ではないというような状況が現実問題として考えられるようになってきている。それ以前の「月世界旅行」などはSF的なものであろうが、アインシュタインの論によって、科学的にも宇宙旅行は現実可能になつてきた時代である。そういう意味からすると、「氷窒素のあたりからすてきな化石を發掘」というのは、その時代はまだ夢であつたロケットとか人工衛星・宇宙ステーションといったもの等を取上げた考えから出てきている表現であろう。実際に打ち上げられたとしても、初期の物は、二千年後の人から見れば理解不能な幼稚なものでしかないであろう。故障したり、軌道から外れたりして宇宙に捨ててしまわれるものも数多くでてくる。それが地球のまわりを漂い、いわば空の「化石のようなもの」になつてしまわないとも限らない。そのような思いからの表現ではなかつたか。

あるひは白堊紀砂岩の層面に

透明な人類の巨大な足跡を

發見するかもしれません

「白堊期砂岩の層面に／透明な人類の巨大な足跡を／發見する」とある。

これは「小岩井農場」という詩の中に「ユリア、ペンベル、わたくしの遠いともだちよ／わたくしはずるぶんしばらくぶりで／きみたちの大きなまつ白なすあしを見た／白亜系の頁岩の古い海岸にもとめただろう／へあんまりひどい幻想だ」とある。いわば幻想にしか過ぎないわけであるが、賢治の眼には見えるのである。現在確認出来ている人類の直接の先祖は、たかだか五百万年くらい前のものである。科学が発達すれば人類の歴史は前へ前へと逆上り、恐竜がいた一億数千万年前まで逆上れるのかも知れない。賢治は科学者の眼をもつてそのように夢想しているのである。

古代インドの宇宙観による「青ぞらいつばいの無色な孔雀」、また、「すてきな化石」という未来の人類が飛ばすであろう人工衛星等を予想した表現、賢治の想像した「透明な人類の巨大な足跡」の発見、いずれも一九二四年（大正十三年）の現実には見ることができないものばかりである。しかし、科学が発達すれば、今は幻想にしかすぎないものであっても、すべて証明されるかも知れない。現在から見れば証明不可能なものであっても、二千年後にはすべてそれが証明されるかも知れない。それが賢治の考えた精神的夢想なのである。

現代においては不可思議とされている心霊現象も解明でき、宇宙においても時間・空間を自由に飛び越え、時空をこえるような科学が発達するかもしれないのである。また、賢治が言うように、紀元前二千年前のインドに時空を越えて逆上り、青空いっぱいこのクジャクを発見するかもしれないのである。そういうことが起こるかも知れないというのが、賢治の切実な夢想である。五官で感じられないからといって存在しないわけではないのである。

第一連・第二連・第三連・第四連に表現されている「すべてこれらの命題」は、どこにおいて生起するかと言うとすべて心の中なのである。現実には起こる訳ではない。あるものについては本を出版するとか、形をとることもあるが、すべて心の中で起こったことである。そして、われわれは現実に生きながら、過去に逆上ったり未来に行ったり、想像したり、幻想を抱いたり、心の中では時空を越えて自由に往き来することが出来るのである。現実の肉体では時間・空間を越えることはできないが、「心象や時間それ自身の性質」としては、四次元的であり、時間を越えることができるのである。物理的には三次元を越えることはできないが、心象の中では四次元的世界を経験することが出来るのである。

「銀河鉄道の夜」という作品があるが、その中に、「幻想四次」という表現がある。「銀河鉄道」の乗客は、ジョンニを除くすべての者は死者なのである。死者は現世の肉体を脱して霊的な存在となっている。霊的存在となった死者は、時空を越えた瞬間移動が可能なのである。「銀河鉄道の夜」には、そのことを暗示する表現が多くの個所に見られる。このような意味からしても、心象と時空、死者の世界は、賢治の心の中では四次元的世界として一つに考えられていたのである。

以上、詩集「春と修羅」の序を見ただけであるが、一見難解に思えた賢治の言葉は、賢治自身の内奥と深く関係していることがわかる。そして、入念に考えられた厳密な構成を持っている。

第一連では、わたくしという現象とそのわたくしの存在、そして現実に瞬間瞬間変化するわたくしの心の問題、第二連では詩集「春と修羅」の性

格、即ち自分という存在とその自分の心から生まれた心象スケッチ、それらを的確に表現している。第三連では、批評というものの自体の本質的性質、第四連では、歴史・地史等そのものの不確実性、その上に成り立っている思考そのものの不安定さ、現在では認知できないもの・不可視なものが科学の進歩によって理解可能になるかも知れないという思いを端的に表現している。

その意味で、この序は、心象というものを賢治なりに論理的に証明したものである。わたしという現象、そのわたしの中に生起する心象、その心象を書き留めたスケッチ、そしてそれらについていろいろな人達の思い思いの批評、そしてそれらの批評はそれぞれがある面で正しい。書かれたものは形としては存在するが、瞬間瞬間変化してゆく。歴史とか地史とか、その時代にはその時代にあつたように。確かに正しい説明は出来るけれど、時代によってまったく意味は変じてくる。過去のこと未来のこと幻想のこと、自分の心象を詩の中でためしているが、科学が発達すれば、それらはいつか証明されることがあるかも知れない。そのような賢治の心霊的なもの宗教的なものへの関心のすべて含んだ、賢治詩発想の原点がよく伺われる序である。私は切にそう思う。しかし、このように思う私自身も、今、ただこのように感じているにすぎないのである。このように感じ思うのもすべて、所詮、「ひとつのこころの風物」なのである。